

特集 丹羽療法 治療レポート

アトピーの塗り薬でがんに 日本でも処方されているプロトピック^(注1)

丹羽先生は8年も前に警鐘

発行元 日本SOD研究会 藤沢
住 所 〒154-0012
東京都世田谷区
駒沢 5-13-1-205
TEL. 03-5787-3498
<http://www.sod-jpn.org/>

今年の3月下旬、毎日新聞に「アトピー塗り薬 米で子供46人がん」という見出しの記事が掲載されました。その薬は、日本でもアステラス製薬（2005年に山之内製薬と藤沢薬品が合併）から販売されている「プロトピック」とスイスのノバルティ社の「エリデル」（日本未発売）という薬です。

いずれもステロイドに代わるアトピー性皮膚炎の新薬として開発され、2000年以降に使用され始めたものです。

記事によると、これら2種類のアトピー性皮膚炎治療薬を使ったアメリカの子供が2004年1月から2009年1月の5年間に計46人が白血病やがんなどを発症し、このうち4人が死亡したとFDA（アメリカの食品医薬局で日本の厚生労働省にあたる機関）に報告されていることが分かったそうです。

ふたつの薬はいずれも免疫抑制作用があり、FDAによると、0歳から16歳でプロトピックを使った

15人、エリデルを使った27人、両方を使った4人の計46人が皮膚がんやリンパ腫、白血病を発症したのです。このなかで50%は、添付文書に「使うべきでない」とされている2歳未満。41%が安全性が確率していないと注意喚起されている1年以上の長期使用者でした。また、プロトピック使用後にがんになった子供の26%は、有効成分濃度が0.03%の子供用ではなく、濃度0.1%の大人用を使っていました。

FDAは5年前の2005年にも発がんに関連する恐れがあるとして使い方に注意するように呼びかけていたのです。

というのが今回、毎日新聞に掲載された記事の内容でした。そのなかに、5年前にすでにその危険性を呼びかけていたというのは、その頃からなんらかの副作用が発覚していたことになります。そこで調べてみたら、なんと、7年前、2003年の10月の読売新聞に、以下の記事が掲載されていた

ました。

『アトピー治療薬プロトピック』

副作用で悪性リンパ腫

という見出しの記事を以下抜粋します。

「アトピー性皮膚炎の免疫抑制剤『プロトピック軟膏』（一般名タクロリムス）による治療を約3年間受けていた奈良県の少女（16）が、がんの一種の悪性リンパ腫（注2）を発症したことがわかった。少女は以前から悪性リンパ腫だった可能性があるが、プロトピックは悪性リンパ腫などのがんを増やす可能性があることがメーカーの動物実験データなどから指摘されている。診察した医師のひとりには「薬の影響で症状が急速に進んだ可能性がある」とみて厚生労働省に副作用として報告。同省は診療経過などの調査を行う。

母親によると、少女は1997年ころから大阪府内の病院で主にステロイド剤による治療を受けていたが効果がなく、2000年6

月からプロトピックを併用した。

当時は成人用しかなく、主治医は「本来、子供には使えないが、効くかもしれない。顔だけに塗る」と説明したという。

先月、兵庫県内の病院の検査で悪性リンパ腫と診断された。そのなかでも皮膚に症状が出る「セザリー症候群」（注3）の疑いが強いという。

プロトピックを処方した大阪の病院によると、少女は最初に入院した'97年末、体内のリンパ節が腫れており、別の専門病院の精密検査でも悪性リンパ腫の疑いを指摘されていたが、発疹や血液中の異常が一時消えたため「ウイルス感染などが原因だろう」と説明していた。当時の担当医は「悪性リンパ腫だった場合に悪化の可能性はあるとは思っていた」という。

少女の母親は「医師には、薄く塗れ」と言われたが、娘は治りたい一心でたくさん塗ることが多く、体にも塗った。まさかがんになる

なんて」と話している。

成人用プロトピックでは因果関係は不明確ながら、海外では悪性リンパ腫3例、皮膚がん3例の副作用報告がある。今年（2003年）7月に小児用が承認された際は

★発がんの可能性を添付文書で警告する ★処方アトピー専門医に限る ★使用患者の長期追跡調査 ★さらなる動物実験が条件になった。

副作用報告をした京都市の島津医師は「皮膚に現れる小児の悪性リンパ腫は初期の診断が難しく、重症のアトピー性皮膚炎とされることも多い。免疫抑制剤を使うと免疫力が落ち、潜在しているがんが急速に進行する恐れがある」としている

狼（ステロイド）が恐いと

言っていたら

ライオン（プロトピック）が

出てきた

7年も前にこういう事例があり、さらに厚生省からの指導等があっ

たにもかかわらず、今年に入って

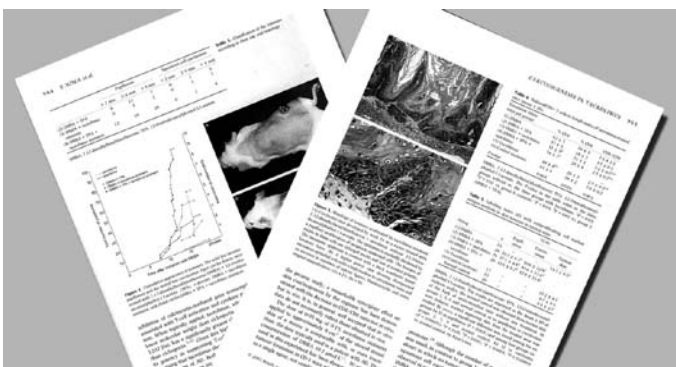
「米で子ども46人がん アトピー塗り薬」

という記事が表に出ました。

そこで丹羽先生にお話をうかがってきました。

——先生、プロトピックで発がんという記事が出ましたが、どのよう

に？ 「僕の言ったとおりのことが起こっ



国際皮膚科学会で丹羽先生が講演した内容を記した学術論文。ここにもはっきりとプロトピックの一般名タクロリムスのことが記され、講演のメインテーマになっていました。

ているんです。僕が8年前にジュネーブで行われた国際皮膚科学会

の講演(注4)で警告したんです」

——どのような

「プロトピックを実際にマウスに塗って実験をした結果を発表したんです。理論上ではみんな発がんの危険性があるとは言っていたが、実際に実験をして結果を出したのは僕が世界で初めて。100匹中10匹に発がんが認められたことを発表したんです。その論文を見てアメリカのFDAが実際に実験をした。そうしたら本当に悪性のリンパ腫が出たんです。それが7年前の新聞記事ですよ」

——プロトピックというのは、今も日本ではアトピー治療薬として処方されていますが、その危険性というのはなんらかの形で警告されているのでしょうか。

「まったくされていない。処方にあたっての注意程度。それも患者さんにはまったくされていない。アトピー性皮膚炎10人中3人は使っているはず。皮膚科に行つてアトピーだと言えば普通に処方し

てくれますよ」

——それでいいんでしょうか。ネットにプロトピックを使用している方の話が出ていたのですが、お医者さんからプロトピックはステロイドと違って副作用がないからいいですよ、と言われたと。プロト



2002年スイスで行われた国際皮膚科学会で講演する丹羽先生

ピックとステロイドはどう違うんですか？

「医者もろくに知らないことが多い。ステロイドよりもいいなんてばかなことがよく言えたものです。

要は、ステロイドの副作用が怖い恐いというのが一般にも浸透してきたからプロトピックが開発されてそれを使うようになったんです。狼が怖いと言っていたら狼よりもっと恐いライオンが出てきたようなものです」

——えっ、ステロイドが狼ならプロトピックはライオンですか？

「そう。いいか、ステロイドはがんにはならないんです。しかしプロトピックは10人中ひとりのがんになるんです。プロトピックというのはもともと免疫抑制剤で、臓器移植の拒否反応を抑えるために飲ませるものなんです。肝臓移植をしたら必ずこれを飲ませる。アメリカで肝臓移植をしてプロトピックを飲んでいたら患者さん千人を7年間追跡調査したら、100人が食道がん、胃がんなどのがんで亡くなっていたんです。僕のマウスの実験もいっしょ。100匹中10匹ががんになった。免疫を抑制するのだから当たり前前の結果です」

——そんな危険なものだったんですね。日本でももっと厳しく注意しないといけないのでは

「日本はしないね。厚生労働省のガイドラインを見ると、ステロイドは短期集中、プロトピックは長期間となっているくらいだから。いろいろ妨害が多いし、厚生労働省からの天下りも諸関係機関には多いから、できないと思いますよ」

——という恐ろしい事実。プロトピックのことだけでなく、私たち患者側はしっかりと薬の副作用の恐さを認識しておかなければ自分の身は守れないということです。化学薬品というのは即効性があり、外傷やウイルスによる伝染病など、時にはとても必要な役割を果たし

◆丹羽先生診察ご希望の方は御紹介、御予約いたします。

※自由診療となります。

丹羽メデイカル研究所

☎0120(731)175

もしくは

日本SOD研究会

☎03(5787)3498

まで お電話ください。

てくれます。しかし、常用、多用すれば必ずどこかしらに弊害が出るということを改めて知らされました。特にいつも先生がおっしゃっている、命を取らないような病気に化学薬品を多用するな、です。



丹羽先生の講演は世界中の医学博士の注目を集めました

注2…悪性リンパ腫

悪性リンパ腫とは、白血球や骨髄腫と同じ血液・リンパのガンである。リンパ節や胸腺、扁桃、脾臓などのリンパ組織に腫瘍ができたり、リンパ球がガン化する。悪性リンパ腫は、腫瘍の組織的な違いから、大きく分けて「ホジキン病」と「非ホジキンリンパ腫」に分けられ、その中でも細胞の種類（B、T、NKなど）があり、腫瘍細胞の増殖の仕方や、がん細胞の形などから、30種類以上のタイプ（濾胞性、びまん性、マンツルセル、等）に分類される。タイプが多い上、病期（I～IVまでの進行度）や年齢、状態などで、同じ悪性リンパ腫でも治療が異なり、素人には理解するのが、難しい分野と言われている。（医者でも専門の血液内科以外はそんなに知識のない人が多く、早期の発見は難しいと言われている）

注3…セザリー症候群

皮膚の悪性リンパ腫の一種で、全身が赤くなり痒みが出現し、発熱とリンパ節腫脹も伴う疾患。フランスの

皮膚科医アルベール・セザリーが報告した。

注4…国際皮膚科学会

この学会は国際皮膚科学会で最も権威のある総会で、40年前から毎年一回、開催されています。ここには世界でも一流の学者が論文を応募しますが、なかなか採用されず、90%以上の人がポスター掲示で終わります。そんななか2002年スイスのジュネーブで開催された32回大会で丹羽

博士の論文が初めて講演に採用され、その後のPlenary session(参加者全員が出席を義務付けられている会)での総会講演に指名され、講演しました。この権威ある超一流の国際学会での日本人総会講演氏名はほとんどない中での指名なので、丹羽博士は20年にわたる研究結果の発表、自然回帰による丹羽療法の考え方や実践、また、科学療法、化学薬品に対する警鐘を世界にアピールしました。■

SOD愛飲者インタビュー

健康になろうと決心

北海道 萩原祥子さん（歯科医師）

先日、昨春秋、取材させていだいた、札幌で歯科医院を開業されている歯科医師、萩原祥子さんからお電話をいただきました。愛飲者インタビューのその後日談が新たにありとのこと。今回の愛飲者インタビューは、そんな萩原さんのお話を紹介します。

最初に、萩原さんがSODを愛飲するようになったのは、息子さんがアトピー性皮膚炎を発症してからでした。現在、高校生の息子さんが5歳から8歳くらいまでの3年間というのは、真夏に半袖が着られないくらいにひどいアトピーに悩まされました。かきむしつ

ては薬を塗るを繰り返し、皮膚は絶えず膿と血にまみれていたといえます。

「歯科医師ですからステロイドなどの強い薬を常用するのは良くないことくらい分かっていました。できればステロイドのような薬を使わない有効な治療法がないものか、いろいろ探しました。学校のお母さん仲間の、あそこがいーらしい、こっちのほうがいーらしいと、耳寄りな話があるとすぐに行っていたのですが、いただく薬は、名前が違っただけで、結局、全部ステロイドでした。そして、それらの皮膚科の先生が共通して言うのは、ダニや花粉、ほこりをなくし、アレルギーのある食べ物を排除することでした」

祥子さんはそのことにいつも疑問を持っていました。ダニや花粉が原因ならどうして症状が腕だけに集中して出るのだろうか。もっと他の部分に出ないのはどうしてだろう。どの皮膚科でもその疑問には

答えてくれませんでした。そんななか、知り合いから札幌の形成外科の病院にアトピーのいい先生が月に数回来てくれているらしいという話を聞いたのです。

そのとき、祥子さんは

「皮膚科じゃないというところがいいかもしれないと思ったんです。もう皮膚科の先生にはうんざりでしたから」

と直感で感じ取り、行ってみたのです。

それが丹羽先生との初めての出会いでした。従来の皮膚科では、まず皮膚組織を取って炎症の度合いを調べることから始めるのですが、丹羽先生は違いました。いきなり息子さんのアトピーでただれた腕を優しくさすりながら、しんどかったなあ〴〵息子さんに向かって話しかけてくれたそうです。そしてチョコレートやナッツ類、外食の揚げ物、フライドポテト、ラードなどはやめること。揚げ物は家でお母さんが作ってくれるものだけ

けにしないと。そしてステロイドは少しずつ減らし、代わりにゴマなどをベースにした特製の飲み薬と軟膏を処方すると説明されました。この特性の飲み薬こそがSODでした。

「息子にも分かるように優しく説明してくれて、息子が自然にありがとうございましたと言ったら、お礼は治ってから言えいいとおっしゃってくれて、涙が出そうになりました。この先生なら絶対に治してくれると確信しました」

しかし、このとき萩原さんは丹羽先生ががんや難病、アトピーの原因でもある活性酸素の研究で世界的に有名な先生だとは知らなかったのです。

息子さんはその後、数回通院してすっかり良くなりました。ただ一度、高校受験のストレスから発症したそうですが、SODと食事で乗り切ったそうです。

そのときにダイレクトメールで送られてきたSOD冊子を読み、

ようやくの著名な丹羽先生と10年前に出会った丹羽先生が一致したそうです。

そんな萩原さん、実は、息子さんだけでなくご自身も特異体質をお持ちでした。果物を食べると皮膚に違和感を覚え、虫に刺されると腫れが3ヶ月も引かない。さらにいつも鼻水が出てティッシュを手放せない。息子さんといっしょにSODを飲み始めたのが昨年の夏でした。

「飲み始めた翌日から変化がありました。便通がすっきりし、虫さされの痕が小さくなり、治りも早くなりました。鼻炎も落ち着いてきて、SODはすごい。これこそが私の薬です」

とおっしゃっていた萩原さんでした。

あれから半年余り。今回、久しぶりにご連絡をいただきました。なんでも今年の2月くらいに息子さんのアトピーがまたぶり返し、制服の詰襟が締められないくらい

にひどくなったというのです。

「これまでの症状のなかでいちばんひどい状態になったんです。顔、首、腕の全体にアトピーが広がり、膿でぬれて制服も体育の柔道着なども着られないくらいになったんです。朝起きたら目が開かないくらいに腫れて、学校にも恥ずかしくて行けない状態だったんです」

息子さんはいつもうつむいて、友達にも会えず、落ち込んでいたそうです。そしてとうとう自分の部屋に閉じこもってしまったとい

います。
「そしたら私も足首に500円玉くらいの大きな水ぶくれができ始め、それがどんどん広がり、痛くて歩けないくらいの状態になったんです。帯状疱疹のひどい状態というんでしょうか、しみるのでお風呂にも入れないくらいでした」

様子さんはSODを昨年の夏から1日に2包ずつ飲んでいました。そのおかげで果物が少しは食べられるようになり、虫さされの痕も

残らなくなったと喜んでいたところでした。そして息子さんは、受験で一時的に出たアトピーがすっかり治まったのでSODは飲んでいなかったそうです。

「美味しくないと言って飲んでい

ませんでしたね。私も2包では少なすぎたんでしょうね。これではふたりともだめだと。そこで、話し合ったんです。根本から身体をきちんと治そう、真剣に治そうと」

そう決心してからふたりは1日に5包ずつSODを飲み始めたのです。
「1日5包ずつ飲み始めたら、息子はたったの2週間で治ってきて、びっくりしました。やはりSODはすごいねーって。私も、2ヶ月ですっかり良くなったんです」

SODをうまく調節して服用された萩原さん。しかし、これだけではやはり喉もと過ぎれば暑さ寒さを忘れるといいます。根本から治すにはと思い立ったのが、やはり、丹羽先生に診察してもらうこ

とではないかと。

「幸い、先生は月に一度、札幌にいらっしゃるので、息子といっしょにぜひ診ていただこうと思つています」

先生に会うのは息子さんが小学校のとき以来。実に10年振りになります。あの時、救われたことは一生忘れられないといいます。御礼も兼ね、今度こそ特異体質から卒業したいとおっしゃる萩原さん。

追ってのご連絡、ありがとうございます。愛飲者のなかにも、もう治ったからとSODをやめてしまつて、またぶりかえす方が多いのも事実です。萩原さんのよう

な医師でありながらこのような体験をお寄せいただくことは、とてもありがたく思います。

歯科医師として多忙な日々を送られる毎日。なぜか歯科医師の方に愛飲者の多いSOD。以前、どうしてでしょうねと歯科医師の先生に尋ねたら、医師としての知識がありながら医師だという変なプライドがないから、本当にいいものを受け入れることができるのではないですか」と教えてもらったことがあります。なるほどと納得しました。また、丹羽先生とのお話などお聞かせいただければ幸いです。ありがとうございました。

SOD様作用食品 体験者の声をお聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒154-0012 東京都 世田谷区
駒沢 5-13-1-205

日本SOD研究会 藤沢宛

TEL 03-5787-3498

までご一報ください。